

## 日本の泌尿器科医が経験する可用性 および再処理に関する問題の程度

Dinah Rindorf<sup>1</sup>、Uiemo Je<sup>2</sup>、Lotte Klinten Ockert<sup>1</sup>、Sara Larsen<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Ambu社（デンマーク、バレルプ）

<sup>2</sup>Ambu Korea社（韓国、ソウル）

# 要旨に対する補足情報



本要旨は英語で執筆、公表された原文を日本語に翻訳したものである。これは、UAA会議（2020年10月15～17日にオンラインで開催）で発表されたものである。



本会議で発表した原著抄録の整理番号はUOP-1307である。

# 序論

アジアでは毎年、膀胱鏡検査が700万件以上実施されている。一方、膀胱鏡への投資には、高額な資本コストと保守継続費用が関わってくる。大きな投資が必要であるため、多くの臨床現場では、利用可能な膀胱鏡の数が限られている。さらに、修理や微生物検査、膀胱鏡検査後の再処理時には、膀胱鏡を利用できなくなる。

そこで、膀胱鏡検査の際に可用性の問題が生じる程度や、膀胱鏡検査施設で使用する様々な再処理方法並びに、膀胱鏡汚染に対する懸念について調査を日本で行った。

# 対象と方法

日本の病院並びに診療所で膀胱鏡検査を実施している泌尿器科医に対し、調査を電子媒体で実施し、2020年2月24日から2020年3月23日にかけて、合計53名より回答を得た。調査には、再処理方法、膀胱鏡の汚染に関して生じる懸念、可用性の問題に関する質問事項を含めた。データはすべてオンラインの調査ツール QuestionPro で収集し、Microsoft Excel で分析を行った。

# 結果

泌尿器科医53名のうち43名（81.1%）が、膀胱鏡検査の経験を10年以上有していると回答した。病院で業務を行っている回答した泌尿器科医は48名（90.6%）で、調査回答時点でシングルユース膀胱鏡を用いていると回答した者は3名（5.7%）であった。膀胱鏡の利用待ち頻度について尋ねたところ、待つ必要がまったくないと回答した泌尿器科医は10名（15.1%）にとどまった。

リユース可能な膀胱鏡に関する問題点について泌尿器科医に尋ねたところ、「診察後の膀胱鏡の再処理」に関する問題を経験したと回答した者の割合が最も高く（40.3%）、膀胱鏡の「可用性」（30.6%）、「持ち運びのしやすさ」（19.4%）がこれに続いた。また、膀胱鏡を洗浄する再処理方法として、泌尿器科医の過半数（54.7%）が、高水準消毒と回答した。一方、滅菌と回答した者は8名（15.1%）、科学的消毒法と回答した者は7名（13.2%）、Tristel社の清拭ワイプと回答した者は1名（1.8%）、上記以外の再処理方法と回答した者は8名（15.1%）であった。膀胱鏡の汚染が生じる予想割合を泌尿器科医に尋ねたところ、平均で11.2%の膀胱鏡に汚染が生じるとする結果であった。汚染の予想割合に対し、使用している滅菌法による有意な差は見られなかった。

# 結論

診察後に膀胱鏡の再処理に関する問題を経験したと回答した泌尿器科医の割合が最も高く（40.3%）、また、可用性に関する問題をほぼ3分の1の泌尿器科医（30.6%）が経験したとする結果であった。また、膀胱鏡を洗浄する再処理方法として、泌尿器科医の過半数（69.8%）が、高水準消毒または滅菌を用いると回答した。

回答者の多くが高水準消毒または滅菌を用いているにもかかわらず、膀胱鏡に平均で11.2%の割合で汚染が生じていると予想した。患者に対する交差感染のリスクを除去できる画期的な膀胱鏡のニーズや、時間がかかる再処理方法やこのために生じる可用性の問題に対するニーズの存在が、この結果から明らかになった。